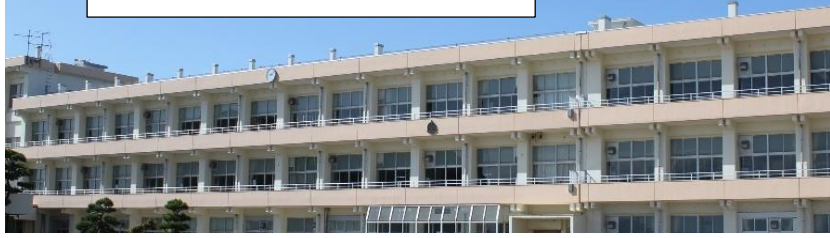


新潟市立鎧郷小学校



学校データ

【学級数】

9学級

【児童生徒数】

171人

【地域コーディネーター

の有無】

有

キャリア教育の充実を図り、子どもの自己肯定感を高める活動

1 はじめに

鎧郷小学校は、周りを田んぼに囲まれ、角田山や弥彦山が近くにそびえ立つ、自然豊かな地域に立地している。

児童は素直でおとなしい子が多い反面、自己肯定感の弱さが全体的な実態としてあげられる。新潟市生活・学習意識調査の「自分にはよいところがある」の質問に対しても肯定的な回答の割合が市平均より低い。そこで地域に根差したキャリア教育を6年生に位置付け、地域の方と触れ合いながら自己肯定感を高める活動に取り組んできた。

2 取組の実際

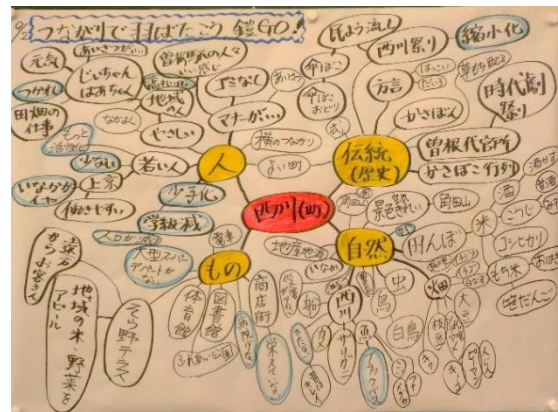
6年生 総合（令和元年度実践）

(1) 地域の農園とコラボ

当校では、1～5年生の生活科や総合的な学習の時間で「地域を学ぶ」「地域に学ぶ」学習を進めている。4年前から6年生のキャリア教育として、協働的な学習を組織するために、学区の「そら野テラス」(地域の食材を中心に販売している農園)と双方の役割を明確にしながら商品開発に取り組んでいる。

(2) 地域を見つめ直す

商品開発自体が目的にならないようにするために、まずはこの西川地域の実態を見つめ直す活動を行った。知っていることを出し合ったり家族や知り合いにインタビューして得た情報を紹介し合った



＜西川町についてのイメージマップ＞

りし、地元西川地域についての思いを共有した。「米・野菜・特産品・地産地消・農業・自然・人のやさしさ」等、地元のよさを再発見した子どもたちは「西川のよさをアピールしたい」という思いを強くもち、商品開発に取り組んだ。

(3) 商品開発

商品開発に意欲をもった子どもたちは、そら野テラスの店長に自分たちの思いを手紙にして伝えた。以下はそら野テラスの店長からの返事である。「私も、この西川の地でそら野テラスを運営して、たくさんのお客さんと触れ合っています。(中略)さて、今年は「井」はどうでしょう。

(後略)」この店長からの返事に子どもたちはさらにやる気を高め、商品開発に動き出した。アイデアを考える上で大事なこととして、「西川のよさをアピールする」に加え、「買う人を笑顔にしたい」が加わった。店長からの手紙にあった「地域の

人との触れ合い」に心を動かされたのである。商品のアイデアは6つの班に分かれて考えた。そしてそのアイデアを、実際にそら野テラスに行き提案した。

(4) プレゼンテーション

班で考えた井案について、そら野テラスでプレゼンテーションを行った。学級の仲間同士の他に、保護者・地域の方々や学校評議員の方等に向けて提案した。店長からは全体を総括してアドバイスをいただいた。自信満々に臨んだ子どもたちであったが、様々な視点から意見をもらい、新たに「お客さんのことを考える」「季節感のある井にする」「作る人の立場を考える」といった視点を持ち、再検討する必要性を感じることができた。

(5) 商品完成！試食会

再検討した案を、再度店長に届け、子どもたちは商品の完成を楽しみに待っていた。販売前に行った試食会では、子どもたちの思いが詰まった井が披露され、子どもたちは感激していた。以下は子ども感想の一部である。

班のみんなで話合い、そら野テラスでの発表、再検討、そして発売記念感謝祭を通して、新たなめあてに向かって考えが生み出されていって今の商品があると思うと、自分たちは今すごいことをしているんだなと改めて感じる事ができました。

(6) いよいよ発売

発売はそら野テラスのイベントに合わせて休日に行われた。限定300個は完売。大盛況であった。購入した方からは「素材の味がとても生きている」「鎧郷近辺の季節の食材を上手に仕立てている」「6年生のたくさんの思いが伝わってくる」等の感想が届き、子どもたちは達成感に満ちていた。ある女子は活動後に次のように振り返った。

私の将来の夢は、いろいろな商品を開発する仕事につくことです。地域の店とのコラボで、地域の人がたくさん買いに来てくれて、商品開発は地域を盛り上げることだと気づいたからです。

3 成果と課題

及び本実践で育成された資質・能力

新潟市生活・学習意識調査の「自分にはよいところがある」の肯定的回答割合は、次の通りである。

・H28	全校	81.5 p	<u>6年</u>	<u>77.8 p</u>
・H29	全校	80.9 p	<u>6年</u>	<u>85.1 p</u>
・H30	全校	80.7 p	<u>6年</u>	<u>82.8 p</u>
・R 1	全校	80.6 p	<u>6年</u>	<u>83.3 p</u>

この実践を開始したH29年度から、6年生の割合が全校の割合を上回っている。本実践が、自己肯定感の向上の一要因となっているといえる。また児童の振り返りから、地域の担い手としての自覚を高める活動にもつながったと考える。

今後もこの活動を継続するために、協働する相手側と目指す子どもの姿や地域像を共有しながら、教育課程を実現していく必要がある。

4 おわりに

新潟市ではコミュニティ・スクールが導入される。「地域とともにある学校」を目指し、「持続可能性」「地域総がかり」「協働活動の充実」をかかげたこの制度に本実践は有効である。